第五講「論理的読解」総復習

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ホーフスタッターはこう書いている。

　反知性主義は、思想に対して無条件の敵意をいだく人びとによって創作されたものではない。まったく逆である。教育ある者にとって、もっとも有効な敵は中途半端な教育を受けた者であるのと同様に、指折りの反知性主義者は通常、思想に深くかかわっている人びとであり、それもしばしば、[a]チンプな思想や認知されない思想にとり憑かれている。**反知性主義に陥る危険のない知識人はほとんどいない。一方、ひたむきな知的情熱に欠ける反知識人もほとんどいない。**

（リチャード・ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』田村哲夫訳、強調は引用者）

　この指摘は私たちが日本における反知性主義について考察する場合でも、つねに念頭に置いておかなければならないものである。反知性主義を駆動しているのは、単なる[b]タイダや無知ではなく、ほとんどの場合「ひたむきな知的情熱」だからである。

この言葉はロラン・バルトが「無知」について述べた卓見を思い出させる。バルトによれば、無知とは知識の欠如ではなく、知識に飽和されているせいで未知のものを受け容（い）れることができなくなった状態を言う。実感として、よくわかる。「自分はそれについてはよく知らない」と涼しく認める人は「自説に固執する」ということがない。他人の言うことをとりあえず黙って聴く。聴いて「得心がいったか」「腑（ふ）に落ちたか」「気持ちが片づいたか」どうかを自分の内側をみつめて判断する。アそのような身体反応を以（もっ）てさしあたり理非の判断に代えることができる人を私は「知性的な人」だとみなすことにしている。その人においては知性が活発に機能しているように私には思われる。そのような人たちは単に新たな知識や情報を加算しているのではなく、自分の知的な枠組みそのものをそのつど作り替えているからである。知性とはそういう知の自己刷新のことを言うのだろうと私は思っている。個人的な定義だが、しばらくこの仮説に基づいて話を進めたい。

「反知性主義」という言葉からはその逆のものを想像すればよい。反知性主義者たちはしばしば恐ろしいほどに物知りである。一つのトピックについて、手持ちの合切袋（がっさいぶくろ）から、自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらでも取り出すことができる。けれども、それをいくら聴

かされても、私たちの気持ちはあまり晴れることがないし、解放感を覚えることもない。というのは、ィこの人はあらゆることについて正解をすでに知っているからである。正解をすでに知っている以上、彼らはことの理非の判断を私に委ねる気がない。「あなたが同意しようとしまいと、私の語ることの真理性はいささかも揺るがない」というのが反知性主義者の基本的なマナーである。「あなたの同意が得られないようであれば、もう一度勉強して出直してきます」というようなことは残念ながら反知性主義者は決して言ってくれない。彼らは「理非の判断はすでに済んでいる。あなたに代わって私がもう判断を済ませた。だから、あなたが何を考えようと、それによって私の主張することの真理性には何の影響も及ぼさない」と私たちに告げる。そして、そのような言葉は確実に「呪い」として機能し始める。というのは、そういうことを耳元でうるさく言われているうちに、こちらの生きる力がしだいに衰弱してくるからである。「あなたが何を考えようと、何をどう判断しようと、それは理非の判定に関与しない」ということは、ゥ「あなたには生きている理由がない」と言われているに等しいからである。

　私は私をそのような気分にさせる人間のことを「反知性的」と見なすことにしている。その人自身は自分のことを「知性的」であると思っている

かも知れない。たぶん、思っているだろう。知識も豊かだし、自信たっぷりに語るし、反論されても少しも動じない。でも、やはり私は彼を「知性的」とは呼ばない。それは彼が知性を属人的な資質や能力だと思っているからである。だが、私はそれとは違う考え方をする。

知性というのは個人においてではなく、集団として発動するものだと私は思っている。知性は「集合的叡智（えいち）」として働くのでなければ何の意味もない。単独で存立し得るようなものを私は知性と呼ばない。

わかりにくい話になるので、すこしていねいに説明したい。

私は、知性というのは個人に属するものというより、集団的な現象だと考えている。人間は集団として情報を採り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う。エその力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を「知性」と呼びたいと私は思うのである。

ある人の話を聴いているうちに、ずっと忘れていた昔のできごとをふと思い出したり、しばらく音信のなかった人に手紙を書きたくなったり、凝った料理が作りたくなったり、家の掃除がしたくなったり、たまっていたアイロンかけをしたくなったりしたら、それは知性が活性化したことの具体的な徴候である。私はそう考えている。「それまで思いつかなかったこ

とがしたくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす力のことを、知性と呼びたいと私は思う。

　知性は個人の属性ではなく、集団的にしか発動しない。だから、ある個人が知性的であるかどうかは、その人の個人が私的に所有する知識量や知能指数や演算能力によっては考量できない。そうではなくて、その人がいることによって、その人の発言やふるまいによって、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスが、彼がいない場合よりも高まった場合に、事後的にその人は「知性的」な人物だったと判定される。

　個人的な知的能力はずいぶん高いようだが、その人がいるせいで周囲から笑いが消え、疑心暗鬼を生じ、勤労意欲が低下し、誰も創意工夫の提案をしなくなるということは現実にはしばしば起こる。きわめて[c]ヒンパンに起こっている。その人が活発にご本人の「知力」を発動しているせいで、彼の所属する集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合、私はそういう人を「反知性的」とみなすことにしている。これまでのところ、[オ]この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない。

（内田樹（たつる）『反知性主義者たちの肖像』）

〔注〕　○リチャード・ホーフスタッター――Richard Hofstadter（一九

一六〜一九七〇)。アメリカの歴史学者・思想家。

○ロラン・バルト――Roland Barthes（一九一五〜一九八〇）。
フランスの哲学者・批評家。

㈠「そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人」（傍線部ア）とはどういう人のことか、説明せよ。

㈡「この人はあらゆることについて正解をすでに知っている」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

㈢「『あなたには生きている理由がない』と言われているに等しい」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

㈣「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力」（傍線部エ）とはどういう力のことか、説明せよ。

㈤「この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない」（傍線部オ）とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえた上で一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。

㈥　傍線a、b、cのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a　チンプ　　b　タイダ　　c　ヒンパン

（次ページより解答欄）

(一)

(二)

(三)

(四)

㈤

㈥

a

b

c

巻末資料　読解法一覧

読解法1　「文の構造」

文を読むときは「主部と述部」「修飾部と被修飾部」「接続部と文」という文の構造に気をつけよう。

《分析記号》
〈主部〉（＝とんがりカッコ）
［修飾部］（＝四角カッコ）
接続部　／（＝スラッシュ）　文

読解法2　「指示語・接続表現」

文を読むときは「指示語」と「接続表現」に気をつけよう。「指示語」があれば「指示内容」を捉え、「接続表現」があれば「前後のつながり」に注意する。また、本書では「論理的なつながり」を強調するため、「接続詞」「接続語」ではなく「接続表現」という表記で統一する。

《分析記号》
「指示語」　＝　○で囲む
「接続表現」　＝　○で囲む

「指示語」のカテゴリー

①「指示語」

前の名詞や説明を指す。

「これ」「それ」「あれ」指示語（指示代名詞）
「この」「その」「あの」指示語（指示連体詞）

②「一般化の指示語（まとめの指示語）」

前の具体例や詳しい説明をまとめる働きがある。指示内容は前に書かれている説明を幅広く捉える必要がある。

「このような」「そのような」「こういう」「そういう」

「接続表現」のカテゴリー

①「解説」

前の語や文や段落を詳しく説明したり、要約的にまとめたりする。

「つまり」「つまるところ」「すなわち」
「要するに」「畢竟」「結局」
↓要約的な言い換え

「言い換えれば」「換言すると」
↓言い換え

「言わば」
↓改まった表現（比喩表現・個人言語）への言い換え

②**「例示」**

前の内容の具体例を引いたり、一部を強調したりする。

「例えば」「言ってみれば」
→読者の理解のための具体例をひく
「とりわけ」「なかんずく」
→全体の中から一部を取り出して強調する

③**「理由」**

前の文に対する理由を説明する。

「なぜなら」「というのは（も）」→　評論文に多い
「けだし」「だって」→　小説文・随筆文に多い

④**「帰結」**

前の文からの結果・結論を示す。（順接が多い）

「だから」「したがって」「それゆえ」
「ゆえに」「よって」「それで」
「そこで」「すると」「そして」
（因果関係がない場合もある）

⑤**「転換」**

前の主張や主題を転換する。

「しかし」「だが」「ところが」「とはいえ」「さりとて」
「それでも」「それなのに」「それにしても」「けれども」
「けれど」
↓「主張」の方向転換（逆接）

「さて」「ところで」「閑話休題」
↓「主題・話題」の転換

⑥「付加」

前の内容に別の内容を付け加える。

「さらに」「しかも」「そのうえ」「加えて」
「また」「および」「かつ」
「だけでなく」「のみならず」
↓単純な付け加え

「一方、他方」「もう一方で」「他方で」
↓対照的な内容を付け加える

⑦「補足」

前の内容と反対の内容を補足する。

「ただし」「もっとも」

⑧「選択」

前の内容と後の内容のいずれか一方を選択する（両方の場合もある）。

> 「または」「あるいは」「もしくは」「ないし（は）」「それとも」

読解法3　「文の関係」

文を読むときは「同値（イコール）」「対立」「因果」「包摂（抽象具体）」という関係に注意する。「文の構造」「指示語」「接続表現」といった形式、および「言葉の意味」といった内容の両面から「文の関係」を捉える。

《分析記号》

①「同値関係」　A ＝ B
②「対立関係」　A ↔ B
③「因果関係」　A → B
④「包摂関係」　A ― a'

読解法４　「レトリック（説得話法・修辞法）」

筆者は自分の主張を理解してもらうだけでなく、納得してもらえるように様々な方法を用いて工夫をしている。その工夫が「レトリック（説得話法）」である。文を読むときには「レトリック」に気をつけよう。

①「問題提起」

読者に疑問を投げかけて意識を誘導し、答えとして自説を述べる。「疑問文」があったら、そのあとに「答え」が来ることを予想しながら読もう。

> 《分析記号》　波線（?）をひく
> 「疑問文（?）」→「◎答え（自説・持論）」

②「具体例」「体験談」

読者がイメージしやすいような例をあげる。また、実感を込めるために体験談をあげる。これらは筆者の主張を伝えるための手段なので、（丸カッコ）で括りながら常に「筆者の主張」を意識して読もう。

> 《分析記号》（具体例）（丸カッコ）で括る
> 「◎主張」→（具体例）（△具体例、体験談）→「◎まとめ」
> 抽象　→　具体　→　抽象

③「引用」

筆者が別の文章の筆者と対話しながら文章を展開することがある。二人で議論を進めることにより、論を深めるためである。
引用は筆者の主張に対して「同意見」「反対意見」「根拠」「具体例」となるものがある。引用も（丸カッコ）で括りながら読んでいこう。

> 《分析記号》（丸カッコ）（引用）で括る
> （△引用）（引用）
> ↓「◎筆者の説明・解釈」

④「比喩」

内容のイメージを喚起しやすくするために別のものに喩える。

> 《分析記号》□で囲む
> 「直喩」＝「ような」「みたいな」をつけて喩える
> 「隠喩」＝「ような」「みたいな」をつけないで喩える
> 「擬人法」＝人でないものを人に喩える
> 「類比」＝同じグループ内の別のものに喩える

⑤「譲歩」

一般論や反論に一旦は理解を示しながらも、方向転換をして自説・持論を展開する。譲歩も（丸カッコ）で括りながら読んでいこう。

《分析記号》（丸カッコ）で括る
（「確かに」「もちろん」「なるほど」「むろん」→△一般論・反論）
「しかし」「だが」「けれど」→◎自説・持論

読解法５　「論理フレームワーク」

筆者は自分の伝えたい内容を定義・整理・分類することで、内容を正確に相手に伝えようとする。あらゆる筆者に共通する整理の仕方が「フレームワーク」である。内容を正確に掴むためにも「論理フレームワーク」に注意しよう。

《分析記号》　〇　で囲む

①「否定」のフレームワーク

Aではなく、（ではない。）Bである。
Aより（ではなく）むしろB。
Aのようで実はB。

※AとBが反対の内容になる場合が多い。
※Bに筆者の主張が来ることが多い。

②「条件法」のフレームワーク

AならばB（AはBである）。
Aの条件（前提、本質、基本）はBである。
Aは常に（必ず、絶対）B。
すべてのAはBである（全称文）。
AのためにはBでなければならない。
（AのためにはBである必要がある）。
BでないならばAでない。
B以外にはAはない。
Bのときのみ（だけ、に限り）A。

Bしてはじめて（してこそ）A。

※主張（命題）を表す。
※Aは十分条件、Bは必要条件を表す。
※「AならばB」の否定は「Aは必ずしもBとは限らない」である。
「AであってBでない」ような「反例」が挙げられる。

③「連言」のフレームワーク

AかつB。
Aさらに、そのうえ、加えて、B。
Aだけでなく、（だけではない。）Bも。
Aのみならず、Bも。
Aと（や）B。
Aつつ、ながら、同時に、ともに、B。

※Aという主張とBという主張が同時になされている。
※「AかつB」の否定は「Aでない、またはBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

④「選言」のフレームワーク

AまたはB。
AあるいはB。
Aもしくは、B。
Aないし（は）B。
Aか（や）B。

※Aという主張かBという主張のうちどちらか一方（または両方）がなされている。
※「AまたはB」の否定は「Aでない、かつBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

⑤「差異（対比）」のフレームワーク

AはXであるのに対し、BはYである。
AはXであるのとは異なり（違って、別に、逆に）、BはYである。

※AとBの相違点を説明する。
※XとYは反対の内容になる場合が多い。

⑥「変化」のフレームワーク

Ａから Ｂへと変化する。
Ａだったものが Ａでなくなる。

※Ａと Ｂは反対の内容になる場合が多い。

⑦「類似（類比）」のフレームワーク

Ａは Ｘである。Ｂも（また）Ｘである。
Ａと Ｂはともに Ｘである。
Ａと同様に Ｂも（また）Ｘである。
Ａと Ｂは Ｘという点で同じである。

※Ａと Ｂの共通点を説明する。

⑧「逆説」のフレームワーク

Aすると、かえってB。
Aと同時にB。

※AとBは反対の内容になる。
※一見矛盾しているように見えるが真である。

⑨「因果」のフレームワーク

AだからB。
AなのでB。
AによってB。
AのためB。

※AとBに因果関係がある。

読解法6　「論証」

筆者は自説を主張するが、その主張は読者にとって飛躍があったり、常識に反する内容であったりする。そこで、筆者は読者に納得してもらうために「論証（証明）」を行う。その「論証」を読むために「論証のフレームワーク」に注意しよう。

①単純な論証

A（○根拠）→B（◎結論）

※根拠Aから結論Bが導かれている。

②論証の連鎖

A（△根拠）→B（○根拠）→C（◎結論）

※主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

③結合論証

A（○根拠）＋B（○根拠）
↓
C（◎結論）

※主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。
※AかBかどちらか一方がもしないならば、この論証は成立しなくなる。

④合流論証

A（○根拠）
B（○根拠）
↓
C（◎結論）

※根拠Aだけでなく根拠Bもあり、結論Cが導かれる。
※AとBはそれぞれ単独でも根拠になる。

読解法7　「心情」

小説文や随筆文では登場人物や作者の「心情」が問われます。「心情」を捉える際にはその心情が発生する「原因」まで捉える必要がある。そこで、「心情」を捉えるための「因果関係」を「心情」のフレームワークとして覚えよう。

①単純な心情

原因	↓	心情	↓	結果
（事態、事情）				（行動、反応、発言）

※「心情」部分が書いてない場合は「原因」と「結果」から推測する。

②心情の変化

心情Ａ　→変化→　心情Ｂ
　　　↑
　変化の原因

※心情Ａから心情Ｂへの変化を捉える。
※心情Ａと心情Ｂは反対のものになる。
※「心情Ａ」「心情Ｂ」「変化の原因」の三点を捉える。

③結合原因の心情

原因Ａ（外的）
＋
原因Ｂ（内的）
→　心情　→　結果

※「原因Ａ」と「原因Ｂ」が組み合わさって「心情」が発生する。
※「原因Ｂ」は特殊事情であることが多く、「セリフ」「心中文」「過去のシーン」によって明らかになることが多い。

④心情の交錯

原因A → 心情A
　　　　　＋　　→ 結果
原因B → 心情B

※「心情A」と「心情B」が同時に存在する。

※「心情A」と「心情B」のそれぞれに「原因」がある。

※「心情A」と「心情B」は相反する心情である場合が多い。

第五講 「理論的読解」総復習

㈠

未知の言説を聴いた時、自分の知識に照らして真理性を判断する前に、自分の知的枠組みを刷新して、実感に基づき合理的かを判断する人。

《㈠別解》
未知の言説を無心に聴いて自分の考え方を改めた上で、実感に基づいて納得できるかどうかを判断する人。

㈡

物知りな反知性主義者は、自分の知識のみによってあらゆることについての真理性をあらかじめ判断しており、他者の意見によって変節しないということ。

《㈡別解》
物知りな反知性主義者は、自分の知識だけであらゆることの真偽を判断し、他者の意見を聞き入れないということ。

㈢

生きるとは他者との関わりの中で影響し合うことだが、反知性主義者たちは他者の考えや判断の影響を受けようとしないということ。

(四)

集団で情報収集をして議論を重ね合意を形成するというプロセスで、集団全体の知の刷新という影響を他者たちに与える力。

(五)

知性とは個人の知識や知的能力のことではなく、他者の思考や判断を受け入れつつ、自己や他者の知的枠組みを刷新する力の事であり、当人が知性的か否かは集団の合意を形成する過程を活発にしたかどうかを見て事後的に判定すれば誤ることはないということ。

（118字）

(六)

a 陳腐

b 怠惰

c 頻繁